

歌のある情景

寺島珠雄

——どうともオオオ なアレエエさ

ツ ツ ツン とギターが入って

——汽笛ひと声 闇のなアかア

ツ ツ ツン とまたつぶく

「ねえ あんたもうたいなよ」

「ほいきた やるともよ」

——当てさえ 知らアないイイ旅のぞらア

レコードに合わせて由緒探に響き返る歌

コッパの尻でカウンターを叩く

地下足袋でとまり木を蹴る

——傷みをオオ風に さらしつつう

ギターがまた ツ ツ ツン と入る

八調のこの歌ではつまりレミファのファの音が三連発で

「ねえさん おれの歌 うめえもんだろ」

「なにさ へんなどこ さわんないでよ」

「へっ 気取ってやがら おう勘定してくれ」

——あばよ ツ ツ ツン

立ちかけた奴も 銭をかぞえる女も

その ツ ツ ツン に 声をはりあげる

釜ヶ崎手帖(2) ⑫

安い屋 歌は「メロ」

店も「メロ」

コドモ連れの中年女が一杯やっ
ている。できあがりかけたその女
は、コドモを放っ雇らかしてオタ
をあけている。やはり酔っぱらっ
ている男の客が、可哀想だとコド
モにみかんをやる。ジュウがッ
クスは「目ン無い千鳥」から「夜
霧のブルース」にかわる。そのジ
ュークホックスのはばでは、三人
連れの男が立ったまま八〇円の焼
酎を飲みわけている。入り口に近
いカウンターでは、おれは隣座に
やられてるんだという男と、おれ
は伊勢湾台風のギセイ者だという
男が、さつきから延々と議論して

いる。お互いに、お前よりおれの
方が大変だったと主張するわけだ。
コドモが泣き出す——(年末某日
の午後のこと)

釜ヶ崎ではちっとも珍しくない
飲み屋の光景ともいえるが、しか
しどこかのコマーションの文句と
同じで「ひと味ちがう」のが銀座
通り西側の安い屋だ。

カーにここは立ち飲みではない。
椅子がある。相当の酔っぱらいに
も不戸を突くことがない。不戸を
突く、というのは「お前さんはお
ことわりだよ」とやることである。
それから入口の左手にあるジュウ
クホックスが、いつも何かうたっ
ていて、その何かの歌の大半は、
いわゆる「なつメロ」だ。百円な
り五〇円なりを投じて曲をセッ
トした者も、他人のかけた曲を聴い

おさらばだアア

なぜか

わからなくてわかる その気分

山谷裏通り

ふとっちょおかみのいる酒場

響いて こもって

レコードが終っても

合巻はつづく

—— あばよ ツ ツ ツン

—— あばよ コッパパン とオオきよオオオ

おさらばだアア

(一九五九年)

(付記) 挿入してある歌謡曲は三橋美智世の唱った「おさらば東京」である。ほんとうは作詞者、作曲者それぞれ

ぞれの名を明記しなければいけないのだが、いまちよつとわからなくて調べてもいられない。その点の非礼を作詞者、作曲者におわびする。尚レコードはキングだった。

(付記-2) むかしの山谷で、こんな情景があつたように、いまの笹ヶ崎にも似たことがあるだろうか。たとえば「笹ヶ崎人情」を合唱しながら。そのへんが、あるようでもあり、ないようでもある。安い屋なんか考えてみても、はっきりしない。景気のちがっただけでもないようだ。

てる者も、その「なつメロ」に、頬杖をついたりうつ向いたりわいと神妙な顔で、何かを思い出してゐる。この店の酒のサカサは知れたものだが、シェークホックスが一番のサカサになつてゐるので、口へ入れるサカサには重きを置かないのだろう。そしてこの店には、見てくれといへばとうに現役を引退したような男唄が、それでもまだシェパンの赤い襟などちらちらさせて、いつとなく、どこからともなく集まつてくる。以前は二十四時間営業で、そんな男唄の誰かが三味線をひいたりして、いまよりももつと賑やかで妖しげな雰囲気だ。そしてそういう店なのに、ノレンには食堂としてあつて、けれど食堂と思つてゐる者はいないのだ。

安い屋の雰囲気というやつを、説明的に書けば、つまり古い笹ヶ崎そのものの、矢意と落魄と寂寥と怨嗟の荒れ密つた、小さな深みか淵のようなものかも知れない、笹ヶ崎全部がそういう場所であるという公式は無誦正しければ、その公式では計算し切れないアラ・アルファが安い屋にあることもまたたしかだ。

それがいかに面白いか、好きだとかきらいだとかは各自勝手にきめればすむ。きめなくてもかまわない。
「なつメロ」のたくさん入ったシェークホックスのある店が安い屋で、その安い屋という店自体が「なつメロ」的なのである。(へて)